



Title	エッセイ：「ありのままに生きる」ことと「多文化共生」：筆者のボランティア経験と映画『バグズ・ライフ』を参考に
Author(s)	田中, 稜
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 162-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72126
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エッセイ

「ありのままに生きる」ことと 「多文化共生」

—筆者のボランティア経験と映画『バグズ・ライフ』を参考に—

田中 稜

東京・日本交通株式会社
未来共生プログラム元履修生（2期生）

はじめに

私は2014年4月に大阪大学人間科学研究科博士前期課程に入学し、同時に未来共生プログラムの履修を開始した。そして、2017年3月に同課程を修了し、同プログラムを離れた。博士課程には進まず、大学と研究の世界から身を引いた私は、すぐに就職を決め、同年4月からはある仕事をしている。仕事の舞台は、夜の大坂の街。何を隠そう、私の仕事は夜勤タクシードライバーなのである。

私の仕事は、昼過ぎの3時ごろに出勤して最初に行う、洗車と点検から始まる。4時に点呼を受けてひとたび出庫すれば、翌日の午前9時から正午過ぎまでの間に帰庫するまで、大阪の街を走り続ける。9時が定時で、その後は3時間までの残業が許されている。実労働時間は最長で21時間。実際にハンドルを握っている時間は、点呼を受けてから帰庫するまでの間の、17時間から20時間ほどである。異様に長い労働時間だと思われがちであるが、隔日勤務と呼ばれる、タクシーではよくある働き方で、出勤は週3、4回、月に12、3回のみとなる。法定外の残業は禁止されているほか、勤務中には最低で計3時間の休憩をとることが義務付けられており、一般的なイメージとは裏腹に、かなり「ホワイト」な働き方を実現している。

この仕事をしていると、よく乗客に話しかけられるのであるが、いちばんよく聞かれることが「運転手さん若いねえ、前は何（の仕事）

してたの？」「なんでタクシー運転手になったの？」といったことである。今の仕事が初めてで、以前は学生であったことを明かすと、（大卒であることを確かめたうえで）どこの大学を出たのか、他に（もっと良い）仕事はなかったのか、など、根掘り葉掘り尋ねてくる乗客もある。それほど、若いタクシードライバーは乗客の目に珍しく映るのであろう。

そもそものはず、近年タクシードライバーは高齢化が進んでおり、その平均年齢は60歳に迫る勢いである。さらに、第二の職として選ばれる仕事というイメージが強く、現にタクシードライバーは中途採用者が大半である。だからこそ、私のような「若い」と乗客には見える人間が、それもよりによって最初の（そして最後になるかもしれない）職として、タクシードライバーを選んだのか、興味が湧くのも無理はない。

確かに、タクシードライバーになる人の中には、様々な事情を抱えている人もいる。しかし、私がタクシードライバーを職としていることに関して、特に複雑な理由はない。私は幼少の頃から、人を乗せて運ぶ乗り物と地図が大好きで、今となって大学に残ることができなくなったという状況が後押しして、タクシードライバーという職を選ぶに至った。それにしても傍若無人すぎる、せっかく大学院まで出たのだからもっと専門性やスキルを活かした職をじっくり探してはどうか、などと言われるかもしれないが、私にとってはこの選択が「正解」であったと思っている。好きなことを仕事にできる喜びは、外部からの物差しで測られたスキルや、その結果として得た学歴とは引き換えにできないからである。もちろん、好きなことを追求して能力や学歴を得たという確信があるのであれば、本人もそれに見合った職に就こうとすることができよう。しかし私の場合は少し事情が異なる。ここで詳述はしないが、私は私自身が抱え続けている苦しみや悩みと向き合うために、大学院へ進み研究者を志していたのである（ということに、最近になって気が付いた）。これを継続すること自体は、本望ではあったとはいえない負担のかかること

であった。だからこそ、自分自身と向き合うことに一区切りがついた今、その負担から逃れるためにも、今度は自分自身を活かそう（生かそう？）として就職した、ということである。

アイデンティティと「共生」

今となって、この「自分自身を生かす」ということが、アイデンティティの問題の特効薬となり、ひいては「多文化共生」にも一役買うということを確信するに至った。ここでは、自分らしく、ありのままに生きることと多文化共生の関係を述べたいと思う。

院生時代、私はアイデンティティの研究をしていた。私とは何か。私は何を望んでいるのか。私は何がしたいのか。それが、私の学問への関心を高めたもののすべてであったように思う。私はこの年になんでも、自分が何なのかよくわからない。もっとも、別に自分が何者かなど判る必要などないと言わればそれまでである。しかし、私は自分が何者かが知りたくてたまらない。なぜ私はアイデンティティを求めるのか。それは、アイデンティティがあれば、私自身の存在を証明することができるからである。裏を返せば、私は私自身の存在に確証を持てないために、自分の存在そのものに不安を抱いているために、それを証明するものが欲しいのである。しかし、自分で自分が何者かを証明する方法がわからない。だから自分は困っている。では、他の人はどうしているのか、実際にアイデンティティの問題を抱えている人に聞いてみよう。それが、私の研究を動機づけた。

ところで、「多文化共生」とは実に怪しい概念である。「多文化」の中の「文化」とはすなわち「文化集団」、または特定の文化集団に属する個人の集まりであると考えられる。こうした集団または個人が「共生」するとは、どのような状況を指しているのだろうか。

「共生」とは何か。字義通りに解釈すれば「共に生きる」ということになり、共通の富や利益を共有すると拡大解釈できる。では、「共生」と「包摂」は同義だろうか。否、必ずしもそうではない。確かに、共

生という言葉を使うとき、その言葉には、何か排除された個人や集団をその言葉の主が属する集団に包摂する、より具体的には、特定の資源や情報へのアクセスを可能にする（保障する）という意図が含まれる。しかし、誰かを包摂するということは、誰か他の人ではない特定の誰かを包摂するということで、もっと強く言えば、誰かを包摂しない（=排除する）ということである。例えば、日本人と外国人の共生といった時に、それは「日本人」とされる人と「外国人」とされる人の共生という意味になる。しかし、この時に「日本人」と「日本人」の共生は問題とはされない。さらに、この時にだれを「日本人」「外国人」とするかの判断は恣意的なものともなりうる。「日本人」「外国人」などとカテゴライズすることで、多様性を描くことは一般的な手法であるが、その多様性そのものが多様化していることを忘れてはならない。「日本人」「外国人」と言っても実際のところは一様ではない。その中にも多様なアイデンティティをもつ人々が存在する。これこそ、「多文化共生」が一筋縄ではいかない理由の大部分を占めている。

「共生」の矛盾——筆者のボランティア経験から考える

私は院生時代に、ある団体で、「外国にルーツをもつ子どものための居場所づくり」という名目のもとでボランティアをしていた。私はそこで、多くのいわゆる「外国にルーツをもつ」子どもに出会ってきた。活動内容はいたってシンプルで、要するに子どもがしたいことを一緒にすること、もしくはそのお手伝いをするというものである。遊びでも勉強でも、物理的、常識的に可能なことであれば何でもする。私は彼ら・彼女らと一緒に活動する中で、彼ら・彼女らが「外国にルーツをもつ」とされる人々であると認識する一方で、そのような認識が常に適切とは限らないということにも気づいていった。

「外国にルーツをもつ」とは、当事者目線の概念よりも、第三者目線の概念である。それは、親が外国出身、本人に外国在住経験があるなど、客観的に見て「それっぽい」と判断される人々が「外国にルーツをもつ」と称される。しかし、支援者を含めた第三者が、

ある人を「外国にルーツをもつ」と見なすときに、本人の主観的なレベルでどれほど「外国にルーツをもつ」と自覚されるかは考慮に入れられていないし、「ルーツ」という概念が当事者諸個人によってどのように解釈されているのか、そもそもその当事者の中に「ルーツ」という概念があるのかどうかも定かではない。そのことを端的に示す例として、私は同団体において次のような思い出がある。「居場所づくり」の活動内で、新たに参加してきた子どもに、とある「中国ルーツ」の子どもを紹介する場面があった。そのときに、別のボランティアが、その「中国ルーツ」の子に「どこルーツ?」という質問を投げかけた。しかし、その子にはその質問の意図が正確に伝わらなかったのか、質問に答えられない様子であった。そこで私が、「関係のある国は?」と質問を変えると、その子はすぐに「中国」と答えた。このエピソードから、当事者が必ずしも「ルーツ」という概念を持ち合わせていないことがわかる。また、自身の「ルーツ」の所在を問われたときに、それは曖昧なものでもありうる。彼の母親は中国出身であるが、彼自身はこれまでの生活の大半を日本で過ごしてきた。そのような彼にとっては、「ルーツのある国」よりも「関係のある国」と聞いたほうが、ストライクゾーン(射程範囲)が広く、当事者にとっては答えやすかったのであろう。「外国ルーツ」の人々の社会的包摂を促す目的で行われている同活動であるが、その試みは、「ルーツ」という名の同質性に当事者を押し込め、本人のアイデンティティを一方的に規定し、本人のアイデンティティをめぐる葛藤や、本人がアイデンティティを主体的に問い合わせるプロセスを暗に否定しているようにも思えた。

「共生」の陥穰——映画『バグズ・ライフ』を参考に

このように考えると、マジョリティがマイノリティを包摂することだけが「共生」のあり方なのかという疑問が残る。「共生」が基本的に声を上げることができる者、すなわちマジョリティからの要請であるという前提に立てば、マジョリティによって包摂されなくとも

自力で生きていくことができるマイノリティにとってマジョリティとの「共生」は必要ないということになる。わかりやすい例としては、ディズニーのピクサー映画「バグズ・ライフ」がある。この映画の中では、権力をもつマジョリティとしてのバッタと、マイノリティとしてのアリとの関係が描かれている。アリは、自分たちが冬を越すために食糧を貯える傍ら、バッタから的一方的な要求により、バッタの食糧を毎年用意する。その要求に耐えかねたアリは、ついにバッタとの決別を求めて、抗争を始める。そして最後に、アリの主人公フリックはバッタの集団のボスであるホッパーに対してこう言い放つ。

アリはバッタのしもべじゃないんだぞ。優秀な働き者だ。だからくる年もくる年もバッタの分まで食べ物を集めてこられたんだ。弱い立場はどっちだ? アリはお前たちなんか要らない。お前がアリを必要なんだ。アリは本当はとっても強い。知ってるはずだ、お前だって。

バッタとアリの関係において、バッタは自らが「弱い立場」(=マイノリティ)であることを認めず、外の世界の危険からアリを守るという大義名分のもと、その見返りとして食べ物を差し出すことを強要していた。アリにとっての不利な条件を根拠に、一方的にアリが弱いと決めつけていたバッタ側であるが、バッタもまた、アリと同じように、食物連鎖のヒエラルキーの中では下位に位置しているという事実を拭い去ることができなかった。それを認めたくないバッタにとって、アリと対等であるよりも、自分たちに対してアリが「マイノリティ」であることのほうが、都合が良かった。

このことから、マジョリティ—マイノリティという関係構図は、最初から存在するのではなく、特定の条件のもと、特定の者の利害関心に基づいて決められるものもある、ということがわかる。すなわち、真の「マジョリティ」などは存在しない。いわば、皆が「マイ

ノリティ」だといっても過言ではない。その事実を認めたくない一部の者が、「マジョリティ」となり自らの優位性を主張し、「マイノリティ」と決めつけた特定の個人または集団を、自らの利益のために利用する。バグズ・ライフでは、そのような、多文化共生の落とし穴ともいるべき事象が、見事に描かれている。

「多文化共生」を謳うことは誰にでもできるし、誰もが望んでいることかもしれないし、誰にでも謳う権利はある。しかし、人間はひとたび権利を与えられると、ともすればそれを乱用する生き物でもある。私は「多文化共生」を語り、そして実践しようとするときに、自分自身が、他者と同じように「弱い」存在であることを認めたくないがために、自分自身はマジョリティとしてマイノリティのために奉仕していると頑なに信じてしまってはいないだろうか、と常に自分自身に問いかけていた。自分自身が満たされているから、満たされていない他者のニーズを満たすという使命感は、一見するとすばらしいようであるが、いつも簡単に、父権的温情主義、パートナリズムに陥る危険性がある。それは、他者のニーズを誤って把握したり、他者の「弱さ」に便乗して、自分の利益のために他者から搾取したりすることにつながる。そして恐ろしいことに、当の本人や、場合によっては当事者でさえ、そのことに気が付かないこともあります。

バグズ・ライフにおける、アリとバッタの関係から見えてくるのは、そのような歪んだ共生関係である。バッタは、アリと利益を共有して「共生」していると思っていたかもしれないが、実はそうではなかった。バッタは、アリ側のニーズに応えることなく、一方的に自分たちの欲しいものを奪い取っていた。しかも、その目的は、自らの不足を補うためではなく、自らの権威を誇示することによって、自分たちが支配されないようにするためであった。このようなバッタとアリの関係は、極端な例であるが、現実の世界でも、程度の差こそあれ、それと似たようなことは頻繁に起こっていると考えられる。

互いの「弱さ」を前提とした「多文化共生」に向けて

では、どうすればよいのか。「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ、日本人と外国人・外国ルーツの人々の関係が、構築されたものにすぎないとはいえ、マクロな視点で見ると、やはり私は「日本人」であり「マジョリティ」の一人である。周囲には多くの「外国人」「外国ルーツ」の人々、障がいをもつ人々、など、「マイノリティ」とされる人々が存在している。このような、マイノリティとされている人々と接するときに、私はどのような姿勢をとるべきなのか。私自身、今の時点で明確な答えをもっているわけではない。しかし『バグズ・ライフ』に登場するバッタとアリがそうであったように、身分や立場に関係なく、あらゆる人々が、お互いが厳しい脅威や様々なるリスクにさらされた「弱い」存在であることを確認することから、すべてが始まるのではないだろうか。すなわち、現代社会に暮らすわれわれは、自然の猛威や、科学技術・情報技術の発展に伴うリスクに囲まれている。これは、マジョリティだろうとマイノリティだろうと関係なく背負っている条件である。これを一方的に自らが「マイノリティ」と見なした人々のだけのものにしてはならない。それは、自らの「弱さ」から目を背けることになるからである。

バグズ・ライフでは、バッタ側のボスであるホッパーを鳥の住処へ誘い込み、ホッパーを鳥の餌にしてしまうことで、アリの世界からバッタ集団を追放するところで物語は終わる。アリだけの生存を考えれば、バッタの存在は不要であるから、このような結末は納得がいく。しかし、もしも仮にバグズ・ライフの物語に続きがあり、バッタとアリが共存の道を歩まなければならない状況であったならば、バッタは、自分たちも、アリと同じように「弱い立場」であり、互いに協力して厳しい自然環境を生き抜かざるを得ないであろう。逆に、アリのほうも、こうしたバッタを自分たちの居場所に迎え入れなければならない。眞の「多文化共生」を考えるうえでは、悪とされる存在を滅ぼすのではなく、加害者の中にも当事者性、マイノリティ性を見出し、共存の道をたどることが求められる。それは、当事者にとっ

ては難しく、酷なことかもしれない。いわば、外国人排斥運動をする人々に、その被害者と同じ弱さやマイノリティ性を見出すようなものだからである。しかし、それができないと抜本的な解決には至らず、真の「多文化共生」は永遠に実現できないであろう。

最後に——「ありのまま」の私にできることは何か？

「多文化共生」は、矛盾するようであるが、それを最も語ることができるのは権力をもつ者としてのマジョリティであり、「多文化共生」は逆説的にもマイノリティの声を封じている。真のマイノリティは声を上げることができない。声を上げることができないという事実が、マイノリティをマイノリティたらしめている。このように、「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティの関係を、数の大小ではなく権力関係としてとらえると、その関係は一筋縄ではいかないことがわかる。マイノリティが求める「多文化共生」とは何なのか、それを求める声が、マジョリティ側の願望としての「多文化共生」によって遮られてしまっては、元も子もない。

このことは、「多文化共生」を掲げる社会における指導者・リーダーの在り方にも示唆をもたらす。多文化共生社会における指導者・リーダーとは、自分自身の主義・主張はいったん括弧にくくり、自らが引っ張る人々の声を真摯に聞くものである。すなわち、多様な価値観の共存を目指す多文化共生社会において、どのような考え方を持った人に対しても平等に接することができる事が指導者の条件である。その人の意見が気に入らないからとか、その人の主張に賛成できないからと言って、指導せずに見放す、というのは、多文化共生社会における指導者としては不適格である。マイノリティのためと言って、彼ら・彼女らの声をろくに聞かず、ただ自分が考える「多文化共生」を推し進めようとする指導者はたちが悪いが、そのような指導者を支持する周囲の人もたちが悪いので、残念ながら、なかなかその欺瞞が暴かれることはない。誰かが告発しなければならない。それをするのは、声を封じられた真のマイノリティである。今こそ、

既存のマジョリティでもマイノリティでもない、その二項対立的な関係性の奥にある、声を上げることができない真のマイノリティたちが団結するときである。自分はマイノリティではないとあきらめるのは早い。自分自身の身分や所属はいったん忘れて、自分自身の弱さを認め、同時に自分と同じように他者も弱い存在であることを悟る。すなわち、「ありのままの自分」に立ち返ることで、自分自身のマイノリティ性を自覚することができよう。それが、真の「多文化共生」に向けた第一歩となると私は考える。

このようなことを考えながら、私は今日もハンドルを握っている。自分自身が、この仕事をしていると、様々にリスクにさらされた「弱い立場」であることがよくわかる。これまでのキャリアや経歴などは何の役にも立たない。その時、その場で自分がどう振る舞うかのみが、自分自身の命運を左右する。そして、自分と同じように「弱い立場」である乗客を、目的地まで安全に送り届ける。これが私の仕事であり、アイデンティティであり、私と他者との「共生」である。